

日本の輸入価格指数の再計測 —Redding and Weinstein (2020) の応用—

陳 碩（日本大学大学院経済学研究科）

本報告は、Redding and Weinstein (2020、以下 RW) の枠組みを用いて、日本の輸入価格指数を再計測することを目的とする。輸入価格指数は、輸入物価の変動を把握する重要な指標であり、その計測結果は、品目間および輸出国間の代替関係や支出シェアの変化をどのように扱うかに依存する。とりわけ、同一品目についても輸出国に対する需要や評価は異なり、外部環境の変化に伴って輸出国別の需要配分が変化する可能性がある。従来の Broda and Weinstein (2006、以下 BW) 型指数は、輸入品目間の代替の弾力性を考慮した指数として広く用いられてきたが、このような品目内の輸出国別支出シェアの変化に含まれる選好の変化を明示的には扱わない。他方、RW は、輸出国別支出シェアに含まれる情報を用いることにより、こうした変化を考慮した輸入価格指数を提示している。したがって、選好の変化を捉えない場合、輸入価格の変化、ひいてはそれに基づく実質所得や厚生の変化が偏って測定される可能性がある。

本報告では、1996 年から 2023 年までの UN Comtrade Database の HS6 桁レベルの日本輸入データを用いて RW 型輸入価格指数を構築し、BW 型指数と比較する。具体的には、同一品目内における輸出国別支出シェアの変化を考慮した RW 型指数を算出し、従来の BW 型指数との差異を検討する。さらに、資本財、中間財および消費財の最終用途別カテゴリーについても両指数を作成し、差異の現れ方を比較する。

分析の結果、RW 型指数と BW 型指数は長期的にはおおむね類似した推移を示し、日本の輸入価格変動における主要な転換点も共通して捉えている。一方で、特定の年には両指数の間に明確な乖離が確認される。また、その乖離の大きさおよび方向は最終用途別カテゴリーによって異なる。これらの結果は、RW 型指数が継続輸出国別支出シェアの変化を通じて選好の変化を捉えることにより、日本の輸入価格指数の測定に一定の影響を及ぼしうることを示唆する。

以上の結果は、輸出国別支出シェアの変化には、相対価格の変化だけでなく、輸出国に対する選好の変化も含まれている可能性を示している。これは、RW が提示した時変的な選好ショックの考え方を支持する結果である。ただし、本報告は当該ショックを直接識別するものではなく、RW 型指数と BW 型指数の差異を通じてその含意を検討するものである。本研究は、選好の変化を考慮した輸入価格指数を提示することにより、従来の指数に内在しうる測定上の偏りを検討し、今後、輸入品から得られる利得や厚生変化を測定するための基礎を提供する。